

# 組 織 神 学 II 学 び の ガ イ ド (2019 年後期)

## 教 科 書

主要テキスト「キリスト教神学」1~4 ミラード・J・エリクソン著 宇田進監修 いのちのことば社  
Millard J.Erickson “Christian Theology” Baker Books (以下、C.T.と略述)  
なお、本クラスは基本的に日本語版で学び、翻訳に疑問がある場合にのみ英語版を参照します。

## 学びの目的

神学は、神についての学である。学生は、聖書の主要な教理を理解するだけにとどまらず、現代において「神学をする」ということを探究する。それは今日の時代状況の中で、絶えず神のみこころは何かを熟考し、神に祈りつつ、聖書に問うていくことである。Theology is the study of God. What does the whole Bible teach us today? The students not only understand Christian important doctrines but pursue ‘Doing Theology’ in the present age.

## 課題と予定

10月	16日	C.T. 32~33章	(キリスト論)	
	月 23日	C.T. 34~35章		
	月 30日	休講	(講師 地区牧師会のため)	
11月	6日	C.T. 36~37章	(贖罪論)	レポート提出*
	月 13日	休講	(講師 出張のため)	
	月 20日	C.T. 38~39章		
	月 27日	C.T. 40~41章	(聖霊論)	
12月	5日	C.T. 42~43章	(救済論)	レポート提出*
		~~~~~冬期休暇~~~~~		
1月	8日	C.T. 44~45章		
	月 15日	C.T. 46~47章		
	月 22日	C.T. 48~49章		
	月 29日	C.T. 50~51章	(教会論)	レポート提出*
2月	5日	C.T. 52~53章		
	月 12日	C.T. 54~55章		
	月 19日	C.T. 56~57章	(終末論)	
	月 26日	C.T. 58~59章		
3月	4日	C.T. 60~結び		

講師の都合、あるいは他の諸事情により、クラスが急遽中止となった場合については、単位認定の規定により、計 13 回以上の授業が確保ができるときは、補講日程を組みません。ただその場合でも可能な限りすべての内容をカバーするため、1 度に 3 章分以上を取り扱うこととします。なお、回数が不足するときは、単位取得を希望する学生の都合を優先して、補講を行います。

## 授業におけるディスカッション

各授業において、C.T.が取り上げている内容をディスカッションできるように、学習予定の各章を予め目を通して、備えてください。

## C.T.のレポート課題

C.T.の各章ごとに設けられている「研究課題」(Study Questions)を参照して、各部ごとに A4 サイズ 2 ページ以内でレポートを提出してください。今期のレポート対象の各部は、  
**「第七部 キリストの Systematic Theology 1」**  
M.Funahashi

人格」、「第八部 キリストのみわざ」、「第十部 救い」です。上記予定にある「レポート提出＊」の日に提出してください（11/6, 12/5, 1/29 の計3回）。レポートの内容は、全体をまとめる必要はなく、関心のあるトピックを選んで、エリクソンの議論を踏まえつつ、ご自分の考えを述べてください。

### 期末試験

現段階の予定では、期末試験は行いません。講師の判断で、小テストを実施する場合があります。

### 神学書のリーディング

神学関係の書籍、文書を読むように心がけてください。提出やチェックはしませんが、C.T.だけではなく、その他の福音派系神学書や、関係する内容のものをできるだけ読むようにしましょう。

### <参考図書>

- ・ 「キリスト教神学入門」 A.E.マクグラス著 神代真砂実訳 教文館  
Alister E. McGrath “Christian Theology: An Introduction” Wiley-Blackwell  
(神学の総合的で歴史的なイントロダクションとして非常に有用な書物。)
- ・ 「神学の喜び」 A.E.マクグラス著 芳賀力訳 キリスト新聞社  
Alister E. McGrath “Theology: A Basic” Wiley-Blackwell  
(使徒信条を手がかりとして、神学の基本を学ぶテキスト。)
- ・ 「組織神学」 ヘンリー・シーセン著 島田福安訳 聖書図書刊行会  
Henry C. Thiessen “Lectures in Systematic Theology” Wm. B. Eerdmans Publishing  
(バプテスト系神学のスタンダードな書物で、過去、EBSでも長くテキストとして使われた。)
- ・ 「キリスト教教義学」 ジェーコブズ著 鍋谷堯爾訳 聖文舎  
(ルター派の教理的把握に役立つ。)
- ・ 「メノナイトブレザレン信仰告白解説書」  
ICOMB “Knowing & Living Your Faith” Kindred Productions  
(MBの教理的理解だけでなく、その特徴や実践についても記されている。)
- ・ その他、ヒッポのアウグスティヌス Augustine (例えば「告白」岩波文庫、中公文庫刊) や、M. ルター Luther (例えば「キリスト者の自由・聖書への序言」岩波文庫)、J. カルヴァン Calvin (例えば「信仰の手引き」新教新書、「キリスト教綱要」新教出版社) の著作等、歴史的な信仰告白書や各種の信条解説書など、近現代の神学では K. バルト Barth のもの (例えば「キリスト教倫理 I～IV」新教新書) などに触れておくことは有益。特に見解が異なる場合、批判する側からの見解を鵜呑みにせず、自分で確かめることが必要。
- ・ 歴史上、最も有名な神学書は3つある。トマス・アクィナスの「神学大全」、カルヴァンの「キリスト教綱要」、バルトの「教会教義学」である。どれも質量ともに膨大なものであるが、図書館等を利用して、部分的にでも読まれることをお勧めする。
- ・ 英書では、より保守的な神学書として、Wayne Grudem の “Systematic Theology” がよく知られている。また、保守的ではないが、最近出された神学書として、注目に値するものとして、D.L. ミグリオリ著 下田尾治郎訳「現代キリスト教神学」を挙げる(邦訳では、まだ上巻のみ)。
- ・ C.T.の優れた点は、異なる神学的立場についても紹介し、評価し、議論した上で、語っているところである(多くの神学書は、自説を述べるだけで終わっている)。また、現代の科学的見地や哲学や思想についても、無視することなく、対話をはかろうという姿勢が見られる。ただ、どの神学書についても言えることであるが、説かれた教説をそのまま鵜呑みにすることはできない。エリクソンの述べていることも、この授業で私が述べることも同様である。

### 学びの評価

単位取得を希望する学生に対しては、レポートとテストおよび授業姿勢により採点される見込みです。

以上